UPĀYA
ウパーヤ
四天王寺大学 仏教教育広報誌
平成30年4月1日
Vol.12

IBUをとりまく歴史遺産

人文社会学部 日本学科教授
前人文社会学部長
須原　祥二

IBUのある羽曳野市・藤井寺市地域には豊富な歴史遺産があります。そのうち百舌鳥・古市古墳群が世界遺産の申請をめざしていることは、みなさんもよくご存じでしょう。

羽曳野市にある応神天皇陵古墳（墳丘長425 m）は、世界最大のクフ王のピラミッドが底辺230 m、中国の秦の始皇帝陵が一辺350 mですから、堺市にある仁徳天皇陵古墳（486 m）と並んで世界最大級の墓になります。日本全国で200 m以上の大きさの古墳は40基近くありますが、それらのうち、この2基も含む8基が百舌鳥・古市古墳群にあるのです。

他の動物とは違う人間の特性に、死者のために墓をつくることがあげられます。さらに政治権力や宗教的権威を示すために、人類社会は巨大な墓を造ってきました。大型古墳がこれだけ集中している百舌鳥・古市古墳群は、「（大きな）墓をつくる」という人間の営みを考える上でも、人類全体にとって貴重な歴史遺産なのです。

今の古墳は多くの樹木が茂って森にしか見えません。その中でも周囲の堀が立派で大きさの実感できる古墳を2つ紹介しましょう。藤井寺駅のすぐ南にある仲哀天皇陵古墳（242 m）と、古市駅のすぐ西南にある白鳥陵古墳（200 m）です。それぞれ駅から歩いて10分くらいなので一度行ってみてください。

もう一つ、IBUの北にある府立大学キャンパスのすぐ北に、来目皇子墓と呼ばれる一辺100 mほどの正方形の古墳があります。造られた時期が新しいので百舌鳥・古市古墳群には含まれませんが、葬られた来目皇子は聖徳太子の弟で、一時は教科書にも取り上げられていた人物です。こちらはバス通りから見えますから、スマホのマップを片手に確認してみてください。

いろは

教育学部
教育学科専任講師
中田　貴眞

今年度は私にとって仏教文化研究所員として最初の1年でした。「いろは」は文字通り「物事の初歩」を表しますが、四天王寺大学では多くのことを学ばせていただいております。今年度は何より「授戒灌頂会」に参加できましたし、「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」では、奈良市の大安寺、太子町の叡福寺・西方院などを巡礼しました。また、野中寺における座禅会にも参加する機会に恵まれ、本当に有り難いことでした。

高校生のときに茶道・華道と出会い、茶道は京都での4年の学生生活の間も稽古を続けていました。そのため時間を見つけては近隣のお寺を訪ねてまわることはありましたが、巡礼や座禅会ではご住職や先輩の先生方からご教示を賜り、また研究熱心な本学学生や留学生たちとともに訪ねることで、改めて不勉強を自覚させられました。学生時代に師から茶の湯・生け花の成り立ちや所作の意味などについてもっと勉強するように言われたことが思い出されました。

こんな私ですが、四天王寺大学の仏教文化研究所員になったことを師に報告したときには、本当に喜んでくださり篆刻の作品を送ってくださいました。そこには「いろは」と刻まれていました。

『利休百首』の最初に「その道に入らんと思ふ心こそ我身ながらの師匠なりけれ」とあります。時間は有限ですので、すべてを一度に学ぶのは難しいことがほとんどだと思いますが、仏道においても、まずは学ぶ気持ちや姿勢が大切なのではないでしょうか。だからこそ、学生のみなさんが毎週の仏教の時間に誦経・写経・聖歌に集中できるよう、堂内の静謐な環境を維持するお手伝いをさせていただけていることに感謝しています。お導師さまのお導きのもとで、一同が可能な限り三昧になれるよう願っております。

学園訓「四恩」について

人文社会学部 社会学科 教授
仏教文化研究所 主任研究員
藤谷　厚生

今回は、四天王寺学園の学園訓にあります「四恩」について、その意義を考えてみたいと思います。学園訓の第二には、「一、四恩に報いよ。四恩とは、国の恩、父母の恩、世間の恩、仏の恩なり。」とあります。まず、四恩とは何かを述べる前に、「恩」という言葉の字義について考えてみたいと思います。

仏教は縁起の教え

仏教では、縁起ということを強調します。この縁起という言葉は、因縁生起という言葉の略語とされています。因縁生起とは、「この世の現象や事物は、すべて原因（因）に諸条件（縁）が関係して、生じたり起こったりする。」という意味です。一般に、原因と結果の関係を因果関係と言いますが、仏教ではそこに関わる「縁」と言うものを重視します。つまり物事には因があり、そこに縁（条件）が関わることで、様々な結果（果）が起こるということです。原因は同じでも、そこに関わる諸条件が変われば、結果もいろいろと変化してくる訳です。従って原因もさる事ながら、条件としての「縁」がとても重要になってくるのです。縁起とは、すべての物事は因と縁によって決定づけられているということなのです。よく「縁起が良い。」「縁起が悪い。」などと言いますが、これは因縁生起の良し悪し、つまり直接的な原因や間接的な諸条件が良かったり、悪かったりすることで結果の良し悪しが決まってくることを表している訳です。

さて、縁起という見方を重視すると言いましたが、この縁起という観点で、私自身の在り方を考えてみましょう。私は、今ここに生きて存在している訳ですが、よく考えてみますと、実は私自身が生きているのは、私自身が単独で生きているのではないということです。生まれて以来、食べ物や着る物、生活に必要な一切の物が、誰かから私に与えられて、私はこれまで生きてこられた訳です。つまり、私たちは多くの縁(助力)によって生きている。さらに言えば、私たちは多くの縁によって、生かされているということに気づかされます。そして、この事実に気づくことによって、人の心には「有り難い」という感謝の気持ちや幸福感が芽生えてくる訳です。日本語には、「お陰さま」という言葉がありますが、実は目に見えない多くの陰の助力があって、私たちは生かされているのです。

恩とは因の心

恩とは、「因」の「心」と書きます。これは因縁、つまり縁起を感じる心を指します。多くの助力によって、私自身がいま生かされていること(その因縁)に気づくこと、気づくことによって、有り難いなあという幸福感、さらに何か自分がその助力に対して、お返しができないかなあという心、これが恩ということになる訳です。お釈迦様は、「人の生を享くるは難く、やがて死すべきもの。今いのちあるは、有り難し。」（ブッダの言葉・『法句経』）と仰っておられます。人として生を受け、多くの縁を頂いて、いま私自身が生かされていることに気づき、感謝できることが、人としての幸福の根本なのだとお説きになっておられる訳です。

さて四恩ですが、これは『正法念処経』『大乗本生心地観経』などの大乗経典にも説かれ、仏教では昔から重要視されてきた教えです。まず、「国の恩」ですが、これは安全で平和的な秩序が維持された国家が在るということに対する感謝の心です。いま世界を見渡しますと、国が崩壊し内戦状態になり、国を追われ逃げ惑い、難民生活を余儀なくされている方々も沢山おられます。そういう悲惨な状況を顧みますと、私たちの日本の国に安全で平和な秩序が維持されているということは、とても有り難いことであると感じられます。国家が存立し、平和な秩序が維持されている背景には、実は多くの方々の苦労や助力がある訳です。次に「父母の恩」ですが、これは親として養育していただいたことに対する感謝の心です。お父さんやお母さんが、一生懸命働いて育てて下さったお陰で、今日私たちは生きて居れる訳です。さらに「世間の恩」ですが、これは身の回りにある社会や人々からの恩恵に対する感謝の心です。人間は一人では生きていけません。物質的にも精神的にも多くの方々の恩恵を被って、私たちは生きていますし、成長もできる訳です。最後に「仏の恩」ですが、これは人間として生きる上で、大切な正しい教えを説いて下さった仏さまに対する感謝の心です。聖徳太子は、十七条憲法の第二条の中で「それ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直さん」（仏の教えに基づかないなら、人はどうして誤った自身の心を改め、成長することができようか。）と仰っておられます。人間として何が大切で、どう生きれば、人は幸せに成れるかを説かれた仏さまの教えに耳を傾けることは、大変意義のあることであり、大切なことであると考えます。

今日私たちは、歴史的に見ても平和でかつ物質的にとても豊かな時代に生きています。しかし、そんな様々な恩恵も、当たり前にいつもある訳ではないのです。多くの助力、お陰を頂いて私たちは生かされているのであり、縁起の理法に結びつくこの「四恩」を実感することは、多忙な現代社会に生きる私たちにとって、とても大切なことだと考える次第です。

ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教教育広報誌「ウパーヤ」の制作に参加してくれる学生編集員を募集しています。仏教・寺院・仏像・歴史、また取材や記事の執筆に興味関心のある方なら、学部学科専攻にかかわりなく、どなたでも歓迎します。

これまで本誌第４面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材や記事の執筆、およびその取材活動の仏教文化研究所ホームページへの紹介などの活動をしてもらっています。また、仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会（写真）の実施状況をレポートしてもらうこともあります。

興味のある方は、第４面下に記載のメールアドレスに連絡するか、仏教文化研究所の研究員にお声掛けください。

ご参加をお待ちしています。（矢羽野隆男）

第12回 卒業生インタビュー（上）

話し手：今西真喜（いまにしまき）　昭和44年3月　四天王寺女子短期大学 保育科卒業生
田中陽子（たなかようこ）　昭和44年3月　四天王寺女子短期大学 被服科卒業生
石井哲子（いしいさとこ）　昭和49年3月　四天王寺女子短期大学 保健科卒業生
聞き手：坂本光德（仏教Ⅰ・Ⅱ導師、人文社会学部人間福祉学科健康福祉専攻専任講師、本欄編集）

2017年に大学50周年（短大60周年）の記念事業を終えてますますの発展を目指す中、卒業生インタビューも記念企画として、本学卒業生でその後も職員として長年勤められた3名の方に集まっていただき座談会を行いました。その内容を2回に分けて掲載します。

坂本：まず在学中の思い出について印象的なことを教えてください。

田中：私と今西さんは、キャンパスが天王寺区から羽曳野市に移って最初の学生になります。校舎も道路も整備に時間がかかり、入学式は5月2日で、その時ようやくバスが大学まで通じました。4月の時点ではバスも羽曳野病院（現：大阪はびきの医療センター）までしか来ていなかったようです。入学式後も大学までのバスの本数が少なく、本数の多い羽曳野病院までよく歩きました。雨が降ると泥道の中を、靴を汚しながら歩いたのが、今では懐かしい思い出です。

今西：泥道についてあまり覚えはありませんが、バスが本当にぎゅうぎゅう詰めだったのが印象的です。

石井：開学当時から長い間キャンパスの中までバスが入って、今の8号館前の三角ロータリーがバスの終点でした。バス停は授業が終わると長蛇の列でした。

田中：クラブ活動ですが、私は茶道部に所属していました。当時、稽古に使っていた茶室が今の5号館の裏手にある林の中にありましたが、そこまで行くのに蛇が出てくる小径（こみち）を週に1回は通っていました。そのうえ和室にも蛇の魔除絵（まよけえ）が飾ってあり、蛇は苦手でしたね。今西さんはテニス部で頑張っていましたね。

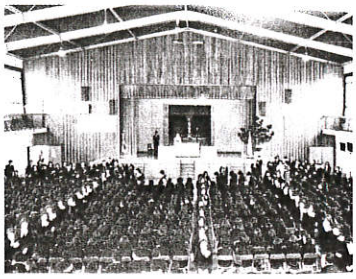
今西：私たちの時代は、クラブ費は大学が配分するのではなく、全クラブの費用が一括して学友会に支給され、それを部長や代表が話し合って配分していました。「うちのクラブはこれだけ必要・・」と賑（にぎ）やかにクラブ費の争奪が行われました。また、開学当時はテニスコートがなかったため、グラウンドの端を地均（じなら）しして自分たちでコートを作りました。男子がおらず女子ばかりなので、力仕事も本当に頑張りました。田中さんも茶道部の会計で頑張っていましたので、学友会で友達になれました。

石井：私は薙刀（なぎなた）部に所属し、体育館で練習をしていました。部員は5人程と少なかったのですが、大学の教育学科の学生とも合同で活動していて楽しかったです。

右から田中さん、今西さん、石井さん（インタビュー時のもの）

田中：今西さんは、活発な学生の印象がありました。「羽曳野月報」という壁新聞の記事も作成されていました。

今西：本当に楽しく青春を謳歌していましたので、副手として大学に残らないかと誘われた際は、「はい」と答えました。それからは授業の準備など補助の仕事から始まり、定年まで約40年働かせて頂きました。


当時の卒業式風景（礼拝の講話もこのような様子だった）

石井：他に覚えていることは、休講があったときには、学生寮（清和寮）に帰っている級友を呼びに行ったことです。例えば2時間目の授業が休講だったら、3時間目の授業を繰り上げて行うというようなことがあって、いったん帰った級友を呼びに行きました。「授業が終われば早く帰れる」と、柔軟でおおらかな時代でしたね。

坂本：当時の礼拝の様子について教えてください。

今西：私たちは旧体育館で起立して行っていました。椅子席ではなかったので、基本は献灯から読経、短い講話で終わり、1ヶ月に1度は外部の著名な方が来られる時もあり長めの講話が行われ、その時はパイプ椅子が並べられ座って行われました。出席すれば出席カードを回収箱に入れていました。

石井：当時の礼拝は正規科目ではなかったのですが、400人ほどの学生のほとんどが出席していました。紀野一義（注1）先生の話が印象に残っています。

田中：紀野先生は、「なんでも感動しなさい」とお話くださいました。「子ども連れの時は感動する言葉を子どもに印象付けなさい」とお話されたのを今も記憶しています。

石井：当時は女子短大でしたので、皆がお母さんになるわけではないけれど、可能性とすればお母さんになる人が多い。子どもたちへの接し方として、散歩する時も手を繋いでボーっと歩くのではなくて、綺麗な花があったら、「あっ、この花綺麗ねー、こんな花が咲きだしたね」ということを子どもに言ってあげる、言ったら子どももそこに自然と目を向けるようになる、そういう子育てを是非してくださいと言われました。それがすごく印象に残っています。だから私も子育てをしながら、子どもたちにできるだけ自然を見るように、「てんとう虫の卵よ」とか、「今日は星いっぱい見えるね」など、心がけて口に出していました。そういうことが大切だと話されていたのが思い出されます。

今西：童謡で知られるまど・みちお（注2）先生も来て下さいました。良い話をたくさん聞かせて下さり、貴重な経験をさせて頂きました。

（次回に続く）

注1：紀野一義（1922-2013）仏教学者、真如会主幹、宝仙学園短期大学学長
注2：まど・みちお（1909-2014）詩人。代表作「やぎさんゆうびん」「ぞうさん」

平成29年度　冬学期「仏教Ⅱ」講話題目

9月14日 学長 岩尾洋先生「写経の意義」
杉中康平先生「仏教Ⅱオリエンテーション」
学生（藤原佳菜・上野匠・喜多朱音・香山紗貴子）「朝食について」
9月21日 福光由布先生「写経の仕方・作法」
9月28日 坂本光德先生「写経心得」
10月5日 藤谷厚生先生「法華経と常不軽菩薩」
「ラッピングバス入賞者の表彰」（細川葉月・丸山憲香・中前 杏菜、酒井祐佳・川越彩乃・本田愛・小野夏実・南礁太朗・片山亜沙美・時本麻美・千葉恭平・野本海斗・久松菜月）
10月12日 杉中康平先生「防災および避難訓練」
10月19日 拝田清先生＆学生（園田慎介・伊勢悠・松島直美・山本美怜・奥村哲平・森本鈴未）「海外体験について」
10月26日 上續宏道先生「学園訓『誠実』を考える」
学生（齋藤美咲・西村今日香・村崎まひろ・涌本茉依）「オレンジリボン運動」
11月9日 楠本久美子先生＆学生（岡崎優依・嶋田こころ・清家彩乃・津村夏希）「食育と健康　食生活をチェック」
11月16日 高橋麻起子先生（本学保健センター看護師）「たばこの害と健康」
11月30日 谷口政巳先生「『希有なるわれら』に思う」
12月7日 e-COCOROEプロジェクトの皆さん（加納愛海・城戸涼・坂本早希・佐藤龍希）「SNS利用のCOCOROE」
12月14日 ゼミコンテスト発表
1位「チーム・コウノドリ」教健・松本ゼミ（井上芽衣・北原夏奈・土岐春香・西村楼夏）、
2位「ラーニング・古墳ズ」生ラ・谷ゼミ（川越彩乃・酒井祐佳・永濵茜・本田愛）
12月21日 奥羽充規先生「仏教（納経の勧め）」
1月11日 矢羽野隆男先生＆浙江工商大学大学院留学生（徐燕斌・徐寒冬・戴宇傑）「留学生の異文化体験―和の心を世界へ―」
1月18日 奥羽充規先生「大学50周年・短大60周年記念DVD鑑賞・仏教Ⅱまとめ」

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

―西方院（大阪府太子町）―

今回わたしたちは大学近くの中之太子野中寺をスタートし、竹内街道を3時間かけて歩き、太子町にある上之太子叡福寺、そしてその門前にある西方院を訪れました。

大阪府と奈良県を東西に結ぶ竹内街道は、『日本書紀』の推古天皇21年（613）の条に開設されたと記されていることから日本最古の官道とよばれています。聖徳太子は小野妹子らを中国の隋へ使者として派遣しましたが、その遣隋使が帰国して都に向かう際に隋からの使者を同伴して通るために立派な道路が必要だと考え、整備されたものだといわれています。

竹内街道は大阪府堺市の大小路から奈良県葛城市の長尾神社に至る全長約30kmの街道です。この日本最古の官道は、聖徳太子の昔から道路網が急速に発達した最近まで、いくつもの役割を果たし、多くの人々が行き交いました。たとえば「石の道」、旧石器時代には石器の材料としてのサヌカイト（讃岐石）を求めて人々は二上山をめざしました。「文化の道」、シルクロードの終着点に向かう最終行程として大陸の珍しい文物がもたらされました。「経済の道」、大和と河内とを往来する商人たちによって多くの物資が行き来しました。そして「信仰の道」、聖徳太子信仰の中心地・叡福寺参り、大峰・高野・熊野・伊勢、西国三十三所巡礼など寺社に参詣する人々が続きました。四天王寺大学の北側を通る竹内街道は様々な魅力的な顔をもつ旧街道です。

私たちが歩いた中之太子から上之太子までの「信仰の道」は、国道166号線と重なる部分が多いですが、それでも所々に旧街道の風情をとどめた町並みが残ります。上ノ太子駅近くの集落には雄略天皇の時代に渡来したという百済系の飛鳥戸造が祖神の琨伎王を祀ったという飛鳥戸神社もあり、歴史の古さを感じさせます。

西方院は、推古天皇の30年（622）に聖徳太子が死去された後、乳母・侍女として太子に仕えた三人の女性―善信（俗名月益、蘇我馬子の娘）・禅蔵（俗名日益、小野妹子の娘）・恵善（俗名玉照、物部守屋の娘）が剃髪して尼となり、聖徳太子の御廟がある叡福寺の門前にお堂を建立したのに始まり、聖徳太子作の阿弥陀如来像を本尊とし、太子の遺髪を納めたと伝えられます。これらの縁起から三人は日本で最初の尼僧とも言われています。

私たちが取材した11月25日はちょうどお寺主催の結縁祭が開催されており、ジャズのコンサートや写経会などたくさんのイベントが行われ、あいにくの天気でしたが多くの人が訪れていました。和伽人形作家の亀井潤氏の作品展示があり、このお祭りのために制作されたという「西方院」（写真）が発表されていました。本誌への写真掲載を、院主の蘇我様、作家の亀井様がご快諾くださいました。リアルな造形に西方院を創建した三人が今に蘇ったような感覚を覚えました。聖徳太子を慈しんだ三尼公のお寺にぜひ一度お参りください。（学生編集員：土井春奈、安本あみ）

仏教のことば

― 懺悔 ―

私達は普段、この言葉を「ざんげ」と読むことが多いですが、仏教では「さんげ」と読み、これまで自らの行った罪悪を悔い改めるという意味になります。

インドの古い言葉であるサンスクリット語のkṣama（クシャマ）が語源で、「懺」は、これを音写した文字で、「忍耐」の意味があります。

仏教では、この「懺悔」により、仏や菩薩の前で過去の罪を告白し、詫びることで悔い改める行為が重視されています。

たとえば、半月ごとに僧侶が集まり、犯した罪があれば、自発的に告白し、許しをこう布薩や、陰暦の４月又は５月からの約３ヶ月間の雨季に、僧侶が１ヵ所にこもって外出せず、修行を行う自恣に、互いに罪を告白し合い、懺悔するという行事も行われてきました。

お経のひとつにも、「懺悔文」があり、「我昔所造諸悪業　皆由無始貪瞋痴　従身口意之所生　一切我今皆懺悔」と唱え、貪（むさぼり）・瞋（いかり）・痴（おろかさ）の三毒により、身（からだ）・口（ことば）・意（こころ）から生じた悪い行いのすべてを仏の前で懺悔することを誓います。

この懺悔により、日々の生活を省みて、自らの行いを反省し、自分を支えてくれているすべての人に感謝することは、仏教の実践原理ともいえるわけです。（上續宏道）

編集後記

須原先生には周辺の歴史遺産をご紹介頂き、竹内街道から太子町西方院へと歴史の道を巡る報告が学生編集員から寄せられた。歴史に支えられて今がある。卒業生職員として本学に長く貢献された方々のお話には、「大事なこと」が今に受け継がれていると実感された。学園にとってもっとも「大事なこと」は学園訓である。藤谷先生は学園訓「四恩」を振り返り、今の私たちにとっての意義を説かれた。そして、中田先生は、私たちがこれから歩むべき「いろは」をお示しになった。昨年度の大学50周年、短大60周年から新しい一歩を踏み出すのにふさわしい誌面である。

（M.K）

研究所員紹介

所　長	岩尾　洋（学長・教授）
主任研究員	藤谷　厚生（教授）
研究員	上續　宏道（教授）
	源　健一郎（教授）
	南谷　美保（教授）
	矢羽野　隆男（教授）
	奥羽　充規（准教授）
	杉中　康平（准教授）
	坂本　光徳（専任講師）
	中田　貴眞（専任講師）
	南谷　恵敬（客員教授）
	桃尾　幸順（客員研究員）

UPĀYA（ウパーヤ）12号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成30年4月1日 発行
発　行　四天王寺大学
仏教文化研究所 仏教教育センター
所在地　大阪府羽曳野市学園前三丁目2−1
TEL:072-956-3181（代）　FAX:072-956-0611
URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA（ウパーヤ）」に関するご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
（件名は「ウパーヤ」としてください）